

機関番号：32675

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720061

研究課題名 (和文) 天明狂歌師の伝記研究

研究課題名 (英文) Biographical Studies on The Poets of the *Tenmei Kyōka* movement

研究代表者

小林 ふみ子 (KOBAYASHI FUMIKO)

法政大学・キャリアデザイン学部・准教授

研究者番号：00386335

研究成果の概要 (和文)：

天明狂歌壇において重要度の高い狂歌師について、その伝をまとめた。すなわち、狂歌壇第2世代のいわゆる「狂歌四天王」の一人であるつむり光、また狂歌壇史についての資料をまとめて今日の研究者に提供してくれた山陽堂山陽の研究が主要な成果といえる。また狂歌壇の最重要人物である大田南畝についても、寛政の改革期の資料を新たに見出し、新知見を加えた。

研究成果の概要 (英文)：

Some of the important poets in *Tenmei Kyōka* boom in the 1780s and after have been studied; that are, Tsumuri no Hikaru, one of the so-called 'Big Four of *Kyōka*' of the second generation of *Tenmei Kyōka*, and Sanyōdō Sanyō who left valuable information about history of *Tenmei Kyōka* to study. Ota Nanpo, the most important figure of the *Tenmei Kyōka*, has been shown insight into his background of his retirement from the *kyōka* world around the Kansei Reform.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、18世紀後半の天明年間(1781-1789)から江戸を中心に大流行した天明狂歌の担い手であった狂歌師たちについての伝記的研究である。

個々の狂歌師の伝記的研究は、本来、天明

狂歌の基礎であるはずであるが、ごく一部の狂歌壇の最重要人物、すなわち四方赤良こと大田南畝、その盟友であった朱楽菅江・唐衣橘洲、平秩東作、また赤良の門人宿屋飯盛こと石川雅望を除けば、ほとんど蓄積がなかった。代表者自身、初期の主要メンバー元木綱、またその門

人にあたる鹿都部真顔(ただしその狂歌歴のはじめにすぎない)や馬場金埒、酒月米人の伝記研究を手がけてきたが、それ以外で彼らに次ぐ主要な狂歌師に辞書的な記述が備わるのみであった。

2. 研究の目的

天明狂歌は、江戸の繁栄を称揚する精神とそれを支える技巧の醸し出す独特の緊張感というその文学的特質の解明もさることながら、それがもたらした流行現象の文化的・社会的影響の大きさについての研究も重要である。黄表紙や洒落本、咄本といった他の文芸ジャンルにも波及したのみならず、絵本・浮世絵、歌舞伎・浄瑠璃・音曲など、広く当時の江戸文化に影響し、また続く寛政期(1789-1801)・享和期(1801-1804)を経て、以後文化・文政期には、江戸のみならず地方へのその流行が広がっていった。その文化的・社会的な影響力の大きさからして、その担い手の地域的・階層的広がり の把握が重要であるといえる。その意味で、狂歌壇における地位的な重要性という観点だけでなく、社会的・地域史的視点、文化史的視点など、多角的に研究すべき作者を選ぶことも必要となってくる。

そこでこれまで研究の俎上に上らなかった狂歌師について伝記情報を整理して研究するとともに、これまで一定の研究のある人物についても、これまで知られてこなかった側面を把握することに努め、天明狂歌の流行現象とは何であったのか、その全体像を考えるのに役立つ人物の研究を少しでも進めてゆく。

3. 研究の方法

狂歌本、墨跡、またその他の資料を広く渉して、個々の狂歌師の伝記情報を集め、そ

れをまとめてゆくほかはないが、そのときの基礎資料として、とくに、山口豊山『夢跡集』(国立国会図書館蔵)・4世絵馬屋額輔『狂歌墓所一覽』ほか(西尾市岩瀬文庫蔵)・林旧竹『墓碣余誌』(東京大学総合図書館)をはじめとする、近代の掃苔資料の情報集積に努めたい。

4. 研究成果

上記のような明治～昭和初期までのいくつかの掃苔資料の情報集積・整理を行ってはいきたが、文献ごとの内容の密度・精度の違いや相互矛盾などがあり、公開するにはさらなる検討が必要と考え、最終的に公開にいたらなかった。しかし、今後さらに研究を進め、その成果を生かしていきたい。

個々の比較的重要度の高い狂歌師、また当時の狂歌のあり方を考える上で示唆的といえる作者数名を選んで研究を進めた。

とくに、天明狂歌壇第二世代、すなわち第一世代にあたる四方赤良や朱楽菅江、元木網の門人世代のいわゆる「狂歌四天王」のうち、これまでほとんど研究のなかった、つむり光についての研究成果が重要であったと考えている。その基礎的な伝記事項から、狂歌師としての経歴、詠風の特徴についてまとめて発表することができた(「天性の狂歌師つむり光」)。父の代には豊岡藩京極氏に仕えた岸氏の家に生まれながらも町人として育ち、若い頃には一時、一筆斎文調門で浮世絵を手がけた光は、天明期の狂歌の爆発的流行に身を投じ、天性ともいえる発想の滑稽で慕われ、盟友宿屋飯盛とともに多くの連中を抱える伯楽連の頭目となってゆく。寛政八年に四十三歳の若さで夭逝した彼は、伯楽連の象徴としてその後も狂歌壇に影響を与える。

その影響のなかでも、とくに具体的にその流れに自らを位置づけ、その権威を利用した

といえる浅草市人をはじめとする浅草連の連中について、光の権威を利用してその活動の基礎を築いてゆく経緯について明らかにした（「天明狂歌と「連」—「正統化」という機能」）。

また、山陽堂（芝の屋）山陽を名のる狂歌師についても、その伝と活動の全容をほぼ解明したことは意義があると考えている（「狂歌師の虚飾—山陽堂という人」および 'Surimono to Publicize Poetic Authority: Yomo no Magao and His Pupils' ）。鹿都部真顔が寛政七年から率いることになった四方連の連中の一人であった山陽は、狂詩において大田南畝の弟子であったことを喧伝するなど、出版物によって盛んに自らの功績を吹聴したことで今日知られている。それとは裏腹に実は狂歌壇的な位置づけはさほど重要とは言いがたいが、そうした狂歌壇における自己の正統性の宣伝の目的で手がけた多くの出版物が、今日の狂歌研究に多くの情報を提供している点で看過できない人物といえる。その山陽の伝の研究を通じて、山陽の活動した寛政から文化・文政期に、狂歌という文芸に求められた権威付けの機能、その意味合いを照射し得たと考えている。

天明狂歌壇の最重要人物である大田南畝については、戦前・戦中期以来多くの伝記研究が備わるが、寛政の改革を境とした狂歌壇からの撤退、狂詠の自粛の実態とその意義については、多くの解釈があり、定見を見ていない。近年では、狂歌活動の不本意な自粛ではなく、本意に沿って学問に専念する好機と捉えたというような解釈も出されてきた。しかしそこで、最近新たに見出しえた南畝制作の大小暦の写しに見える自嘲的な一首を用いてその状況に一石を投げ、随筆類に見える当時の狂歌をめぐる評判、それらに対する南畝自身の思いなどを漢詩などから読み解い

て、そうした研究状況に一石を投じた（「笑はば笑へ—政変期の南畝」）

また、別に天明期の南畝肖像に多く採用される膝を抱える形象が、百人一首の藤原定家像に基づくことを指摘し、彼の天明狂歌壇におけるその位置づけの反映として論じたことも伝記研究の一端であろう（「膝を抱えた南畝像」）。

さらに、南畝の狂歌観、狂歌論については、資料の不足からこれまでほとんど論じられてこなかったが、近年入手した狂歌合の判詞の写本の内容を分析して発表し（「四方赤良の狂歌判詞」日本近世文学学会大会）、今後論文としてまとめることを準備している。

2008年度末に刊行した論文集『天明狂歌研究』には、上記の論文「笑はば笑へ—政変期の南畝」を、若干の増補・改訂を加えて収録するとともに、以上の研究を通して得られたその他の種々の知見を、それまでに発表してきた、元木網・智恵内子夫妻、鹿都部真顔、馬場金埒、酒月米人といった狂歌師についての論文に取り込み、多くの加筆・修正を行った。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①小林ふみ子「天性の狂歌師つむり光」『国語と国文学』第88巻第5号 2011年5月 査読無 136-147頁

②小林ふみ子「膝を抱えた南畝像」『日本文学』第58巻第10号 2009年10月 査読無 32-40頁

③小林ふみ子「天明狂歌と「連」—「正統化」

という機能」『国文学 解釈と鑑賞』第74巻
第3号 2009年03月 査読無 83-91頁

④小林ふみ子「狂歌師の虚飾-山陽堂という
人」『国語と国文学』第85巻第7号 2008
年7月 査読有 44-58頁

〔学会発表〕(計1件)

①小林ふみ子「四方赤良の狂歌判詞」日本近
世文学会 平成22年度秋季大会 2010年11
月21日 島根大学松江キャンパス

〔図書〕(計3件)

①小林ふみ子『天明狂歌研究』汲古書院
2009年2月 全412頁

②Fumiko KOBAYASHI 'Surimono to Publicize
Poetic Authority: Yomo no Magao and His
Pulils'
*Reading Surimono: The Interplay of Text and Image in
Japanese Prints*, (コレクション展示図録、Museum
Rietberg /Hotei Publishing 2008-12) pp.46-53

③小林ふみ子「笑はば笑へー政変期の南畝」
『蜀山人大田南畝』展図録(太田記念美術館)
所載論文(2008年05月) 99-104頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 ふみ子 (KOBAYASI FUMIKO)
法政大学・キャリアデザイン学部・准教授
研究者番号：00386335

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：